



浪華

天王寺于蘇

振

乃

祀



高津造花



むゝ社^{こそ}浪^{なみ}連^{つら}田^の令^をい^はれ^るあ^まへ^は京^{みや}師^しは
猪^{いの}も。寄^よる^るる^るる^るあ^まね^は昌^{あき}れ^は形^{かたち}状^{じょう}は^は弦^{しん}に
う^うゝ^ゝ其^{その}所^{ところ}以^も字^じ知^しも^もと^とゝ^ゝあ^ある^る
大^{おほ}阪^{さか}れ^れる^る際^{さい}。己^{おの}次^{つぎ}は^は妙^{みよ}持^ぢ墨^{すみ}者^{もの}や。
龜^{かめ}井^い漲^{ふさ}敷^し天^{てん}王^{わう}寺^し。春^{はる}れ^れ鈴^{すず}の^の標^{ひょう}文^{ぶん}。
秋^{あき}乃^{ゆふへ}夕^{ゆふ}れ^れ賦^{めい}山^{さん}海^{かい}で。送^{おく}家^けか^かた^たや^やき
道^{みち}標^{ひょう}を^を。園^{えん}夜^よ虫^{むし}燈^{とう}より^{より}標^{ひょう}あ^あは^はれ^れは

永一
翁の筆次さび哉。はるに強^たき婦^{あづま}乃
其^{かく}と抑^{おさ}へたるれ小過^{せうが}る家づと
あゝと。彼^ち此^こ人の親^いやへと見^み
ぬ

嘉永四年む川き

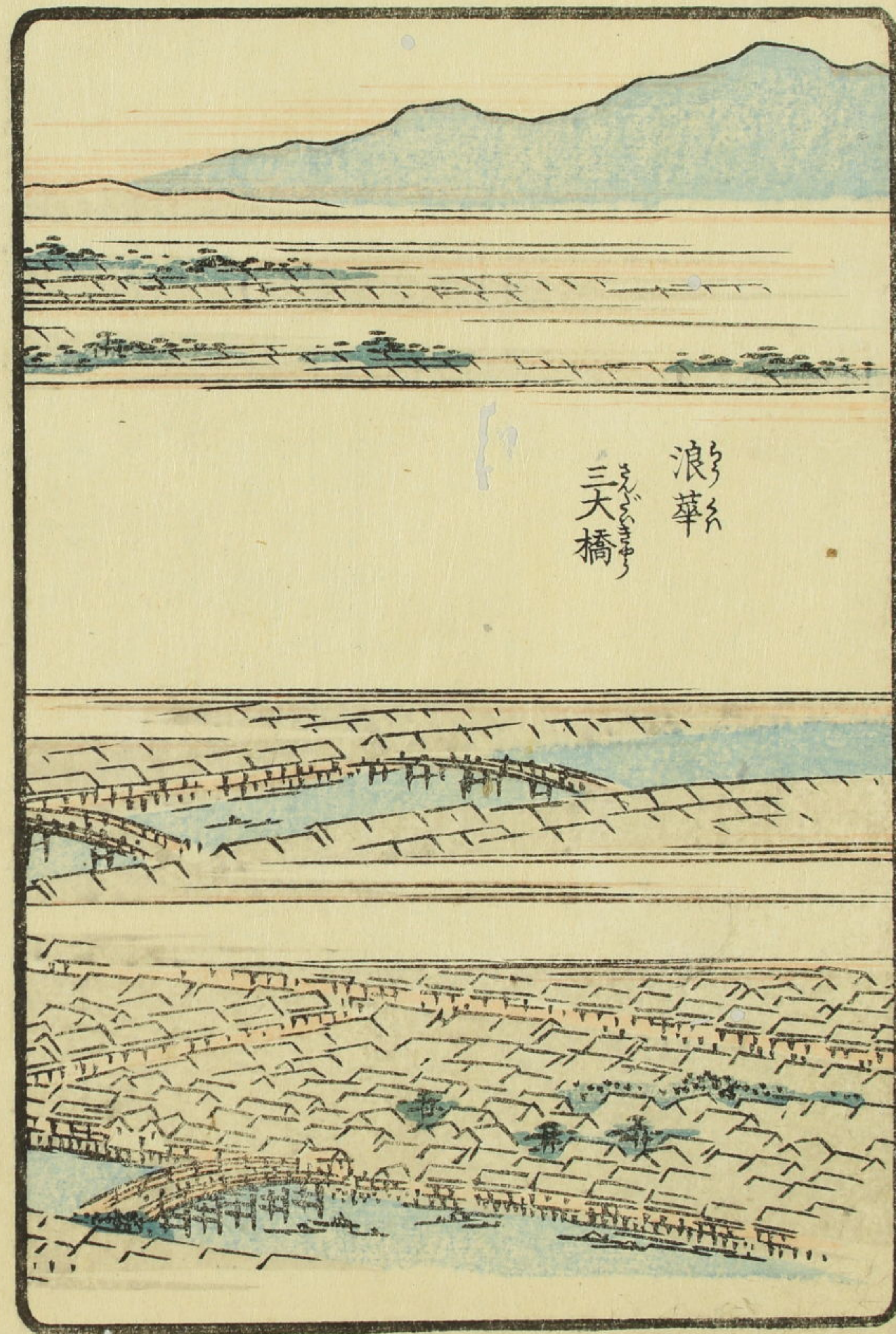
伴非太 山川正宣識

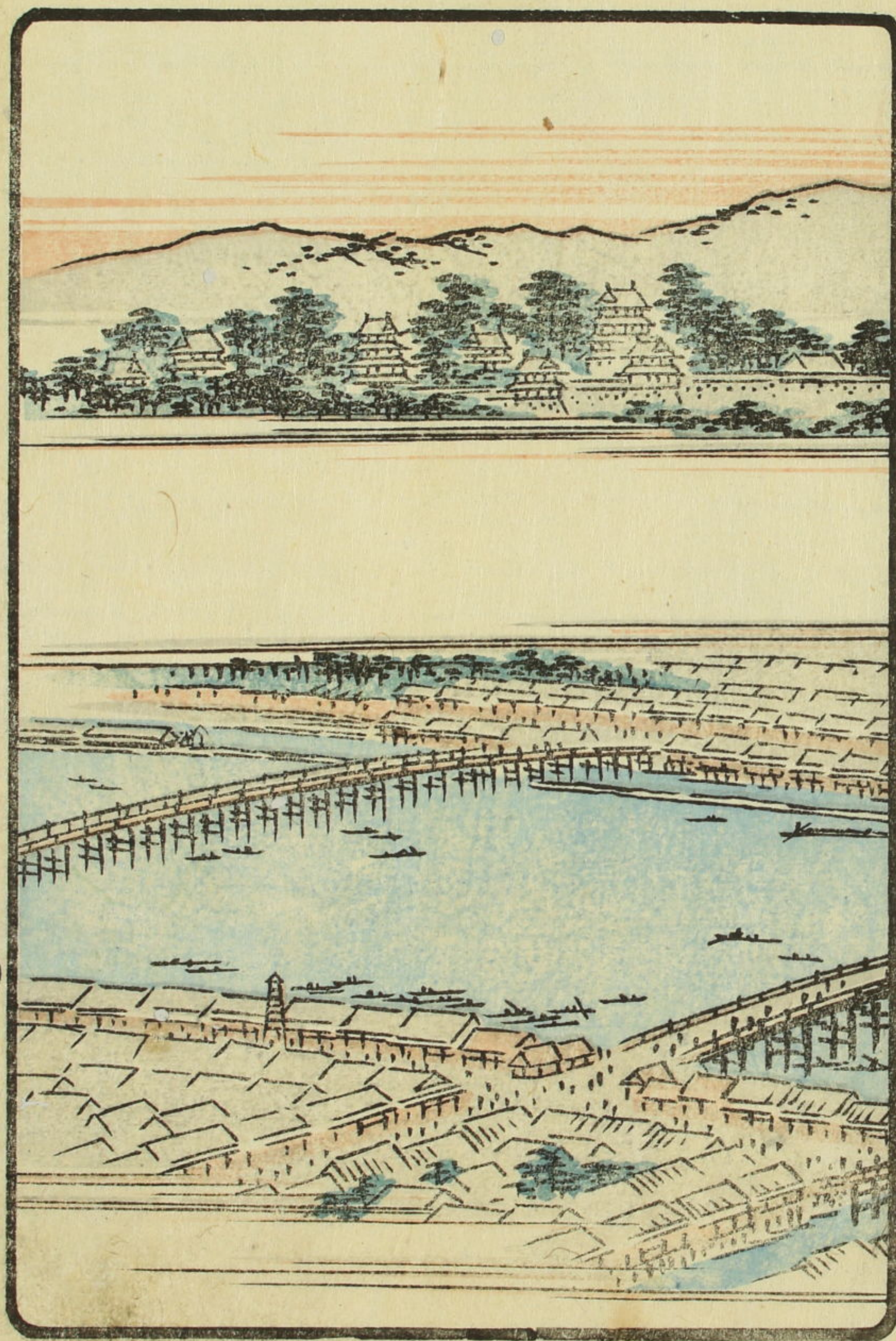
ふかのふとふのほりて
ふれいの侍製めきうふみせ

今も然

教慮うも 山元ふ ちやん

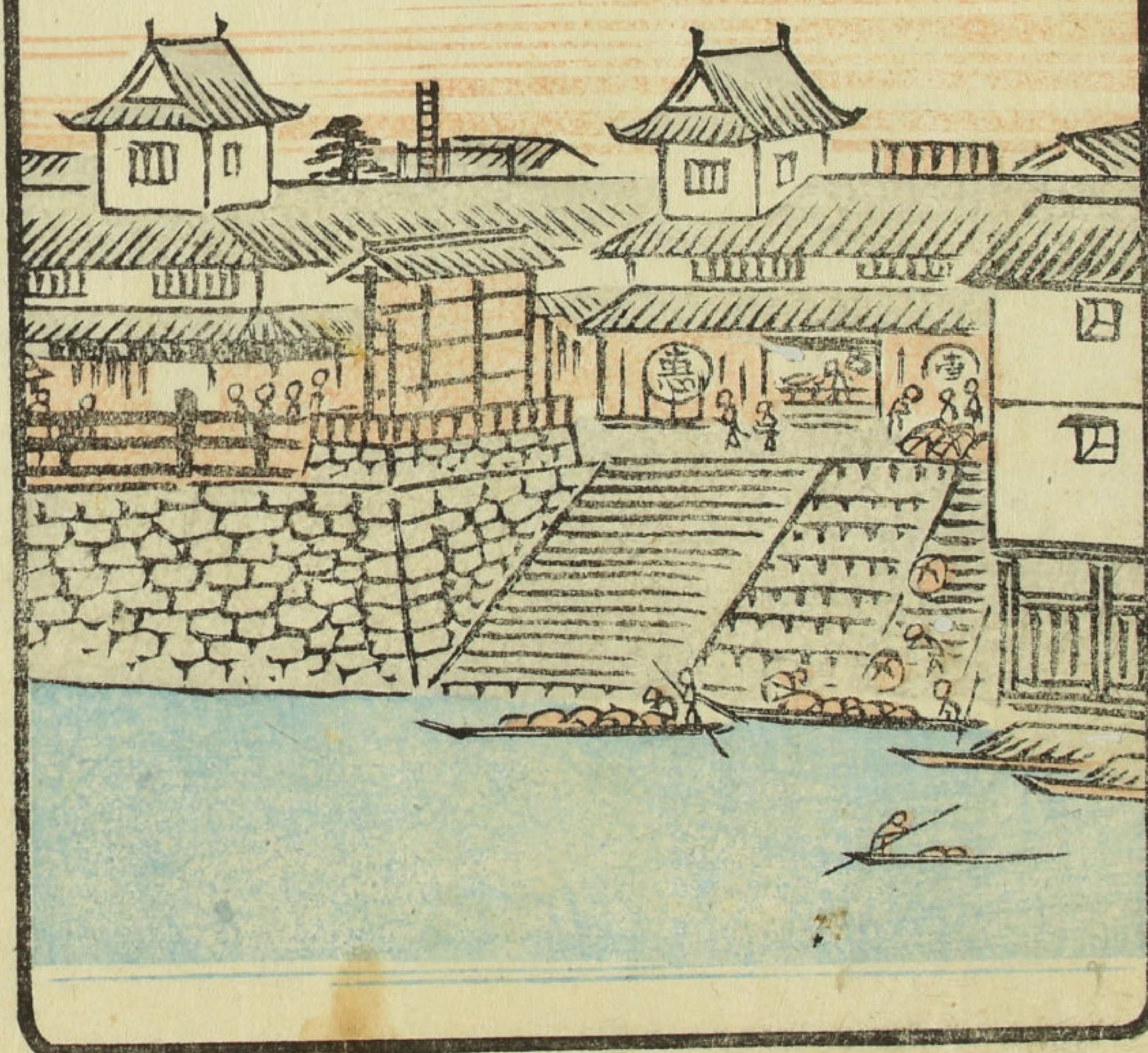
春の ながまつて





高麗橋

當橋詰の左右小城郭ふ
ひれ矢倉のり号けく
矢倉屋敷といふ又堺をじ
平野町の角みかろのてくれ
櫓の浪花市中の奇観し
さて恵比須屋の呉服店と
ちり玉露堂の團扇店
岩城三井の呉服店虎屋
伊織の菓子店其外種々の
商家軒とて交易は賑
うしく此地西の



西横堀北の大川南の長堀
東の安川で限る
凡て船場と称す

乃

草

卷之五

うきや

鼎丸



高麗橋 東堀より西へ川を十三橋の内川上 凡そ大坂よりして諸方
 小至る行役の里数と此橋よりして定むる銭例といふ此川と
 東堀と号し是より東と上町といふ西と船場と称す此橋の
 上よりと今橋と号し此橋條の船場は方と俗に肉町や
 号し名小町とる富家豪家軒と烈ぬ又此辺より北戎
 小浜といふ此は金相場とて日毎は市中の両替屋のやり金
 の賣買とほし相庭と立て金の價と定む是は堂島ふ於て米
 の價と定るといふ是は又浪花の一奇といふべし

神明宮

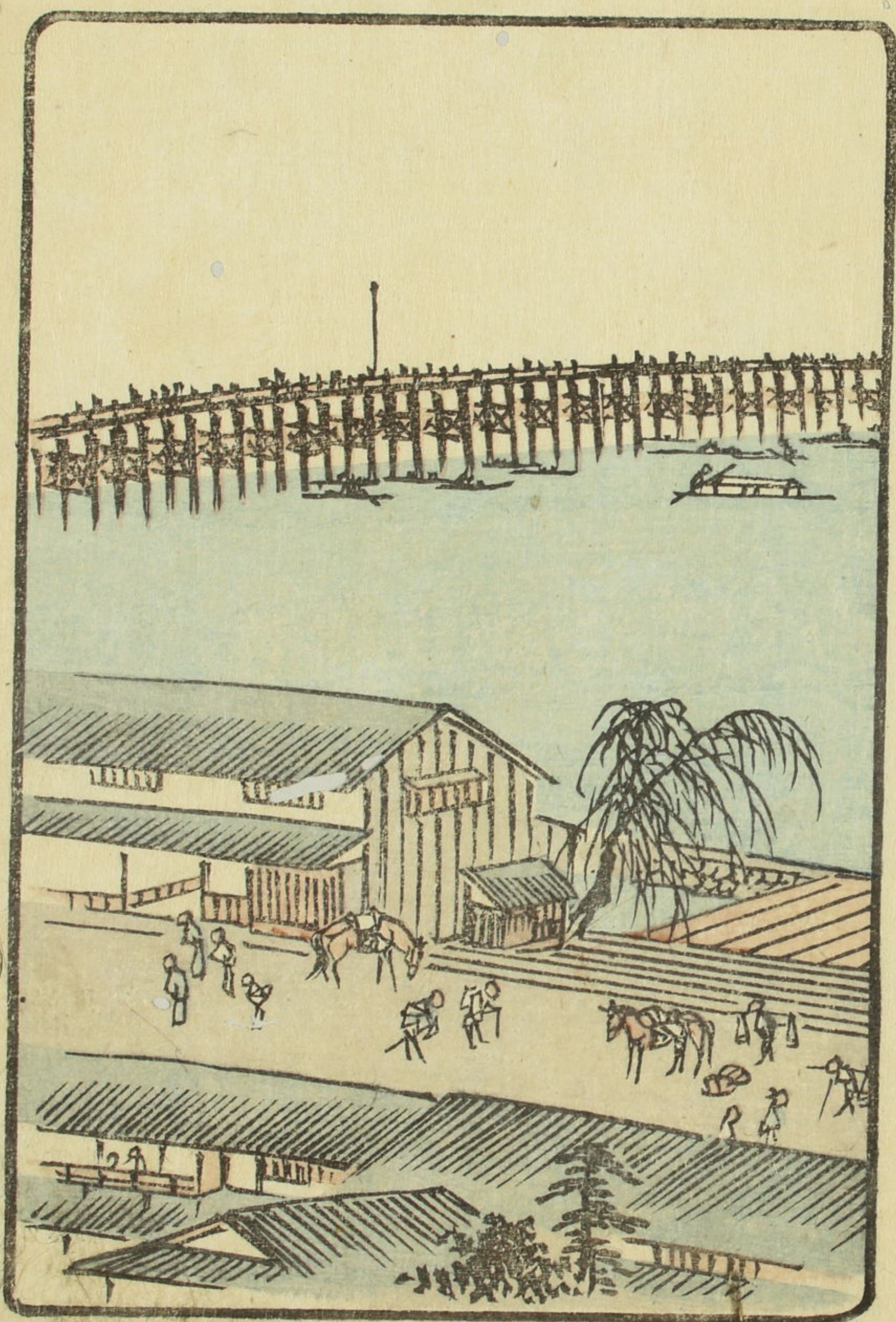
高麗橋東詰より東南 俗に平野町神明と云所祭三坐
 中央天照皇太神左八幡宮右春日明神例祭六月十六日

九月十六日より 毎月一六日の夜系訪群とる是より
 諸賈夜店と出 販ぐ事夥し

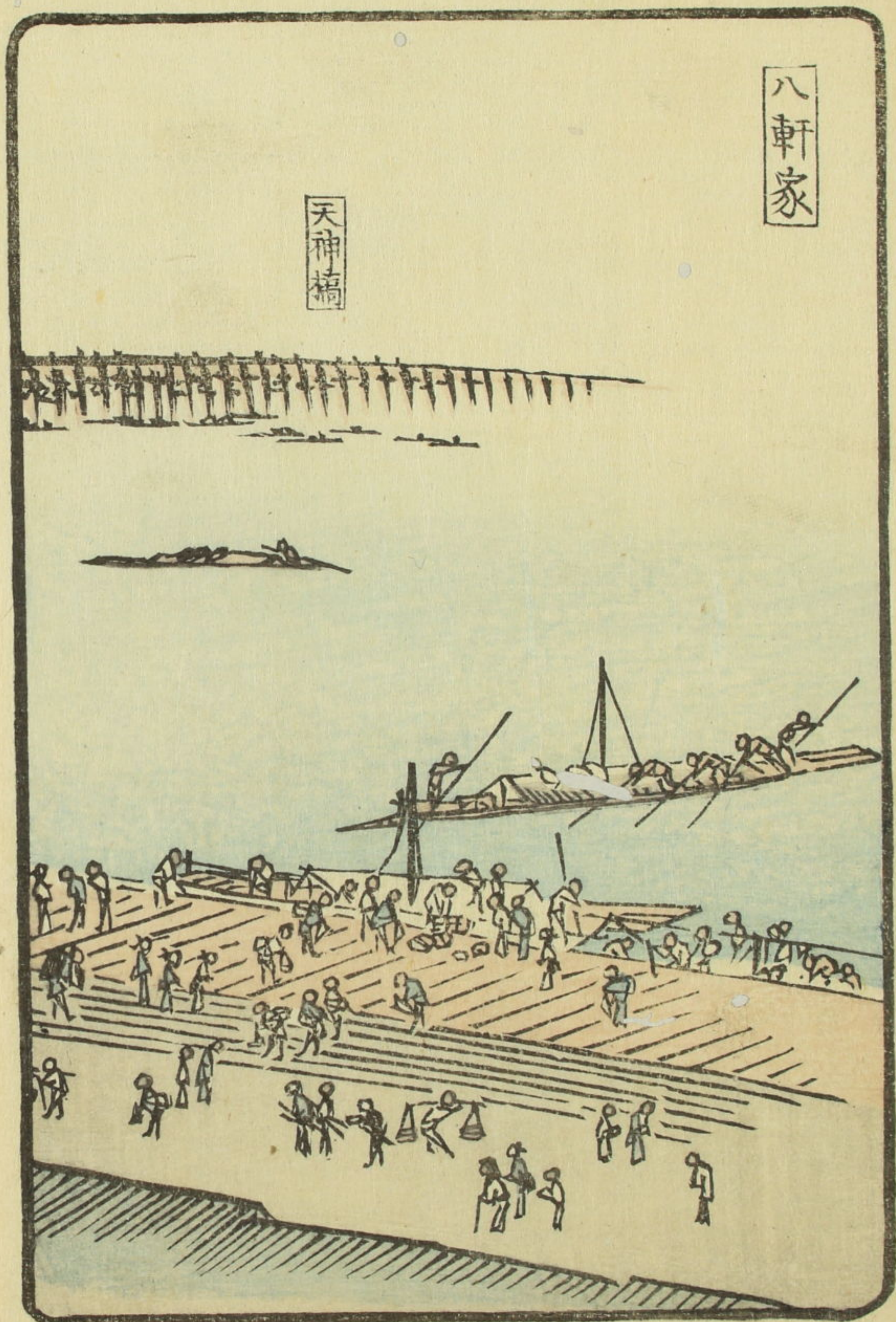
天神橋

淀川より大川を架せり川より第二の大橋之長サ百二十二間三尺
 高欄壯觀なり南端ハ系橋六丁目北端ハ天満十丁目といふ

當橋の南詰より東に至るハ軒家の船着ありて京師への
 通船朝夕出入ありて最賑し 所謂三十石の秋船と云今
 井舟の朝船ありされ下の客小支度進る舟宿上客集る



四二



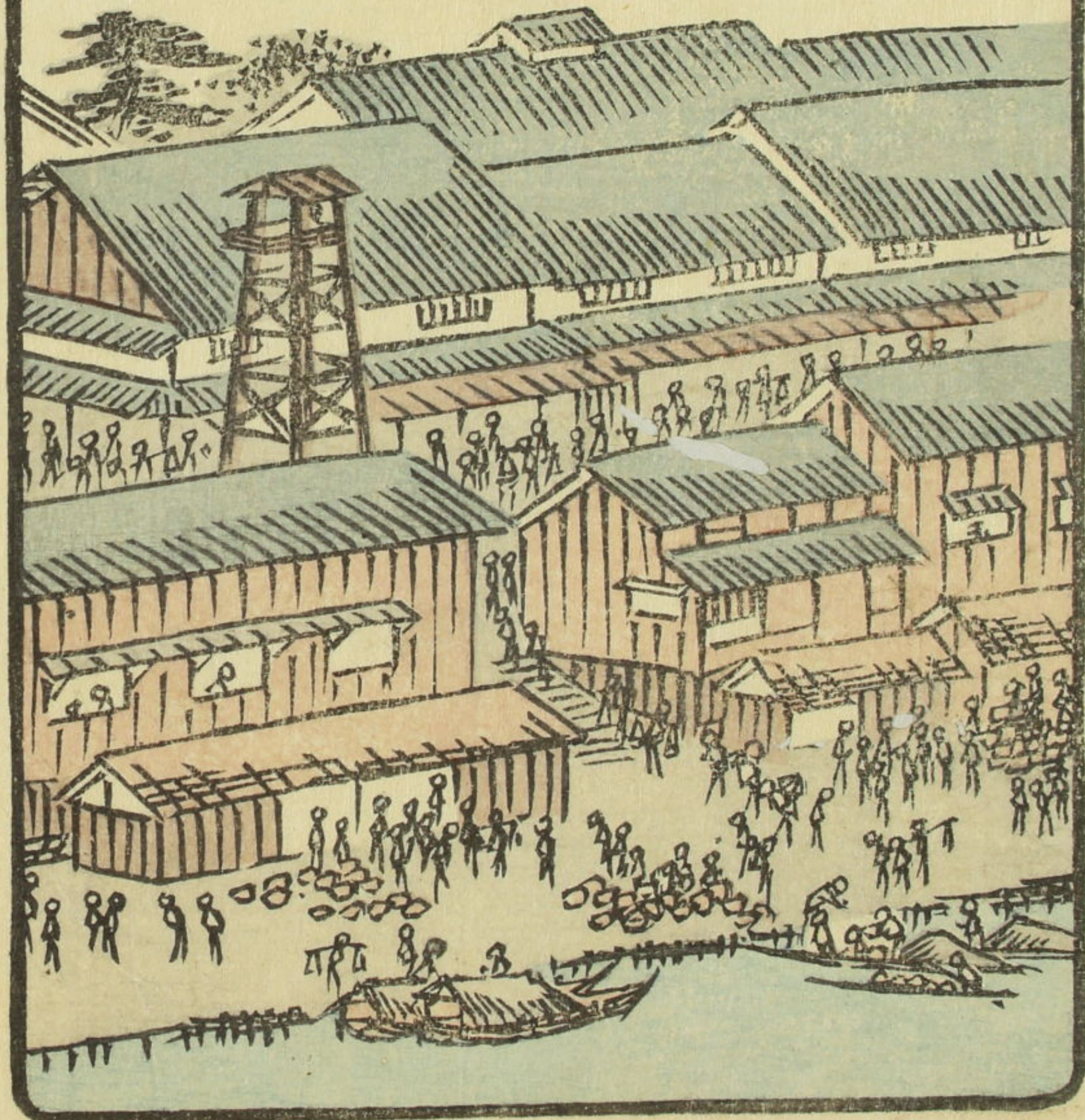
八軒家

天神橋

初

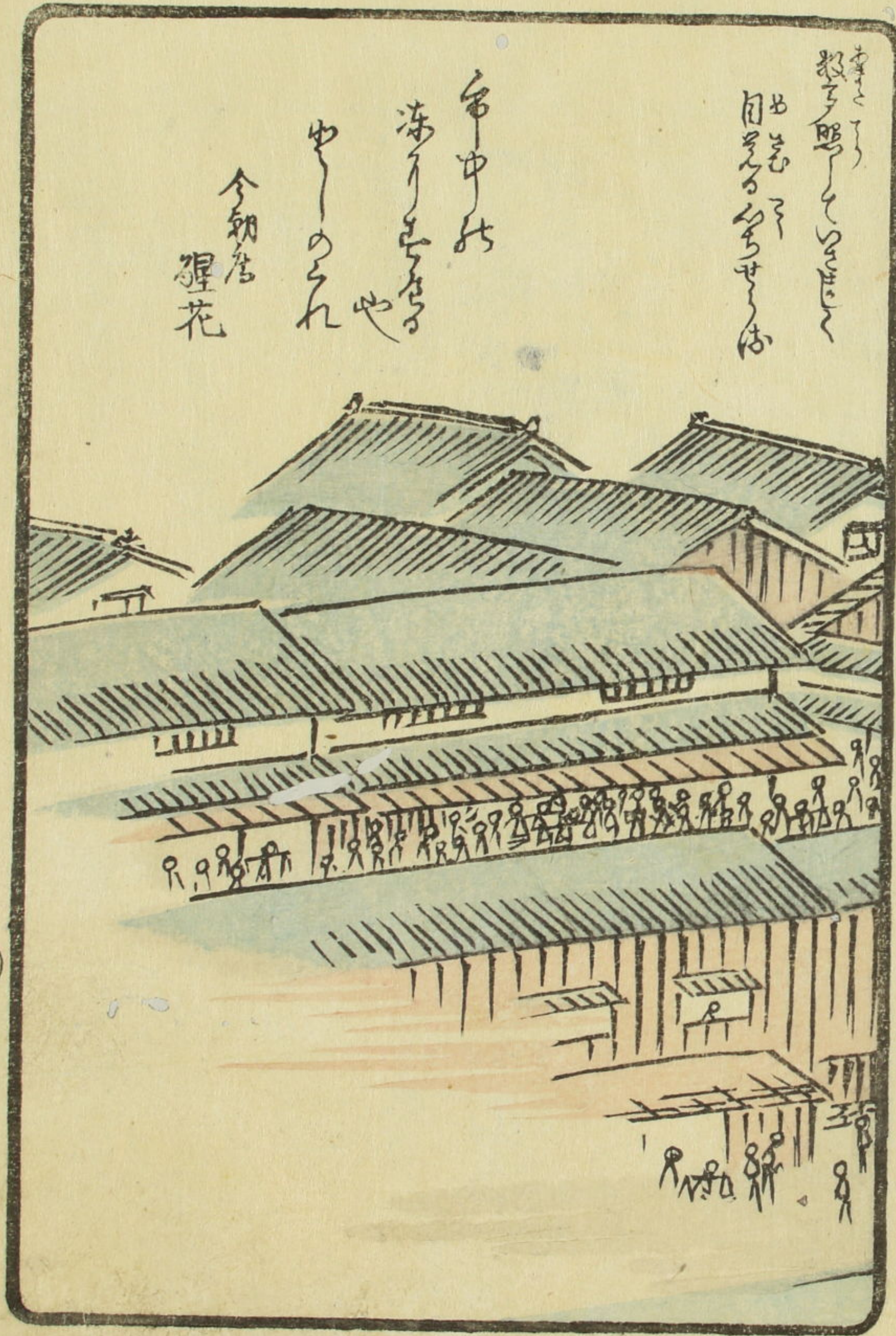
天満菜蔬市

此市場の日々朝毎
 数人の商人あつて
 菜蔬を賣買する
 ものの便がよい
 知法の家菜より
 其の菜蔬ふり
 中ではきりり
 別て秋の
 栗の密柑
 夜の市
 と



おきりり
 別て秋の
 栗の密柑
 夜の市
 と

市中
 凍り
 や
 今朝
 醒花



船次陸下荷着る馬子。何う声高小罵るあれば。船主は切の
狭きと口角衆あつて。終日静ちる事なれハ。蟹昌の證

とつて

古名を十日宿といひて。いふ人より舟着あり天和
開闢の大坂の果より十日宿ハ。いふやとあり

座摩宮舊趾

ハ。お家の上石町の辺より
つやの神をいひ

例年六月二十二日座摩神社

夏後の神事の時神輿此所へ渡御なり。往古は地ふ鎮座なり。が

後世今の地へ遷せし。とて今尚御鎮座石といふなり。此石は

故小石町の名あり。と云信は座摩の市旅所と称に

菜蔬市場

天神橋小橋より車へ渡り通三丁より間のなり
小橋より西と市の側より。菜蔬乾物の店あり

原此市場へ

京橋南詰ふたつ年々。有るが度安の頃其地。市開地

とありて。京橋庁原町へ引移り。然るに商人の往来ふ。鎮座

あり。とて替地と免され。今の所は移りてより。日々小店と

飾り。賣買市人鳥の如く。小集ひ。餅の如く。草屋。賑ひ

事。常ふたむし事なり

天満天神社

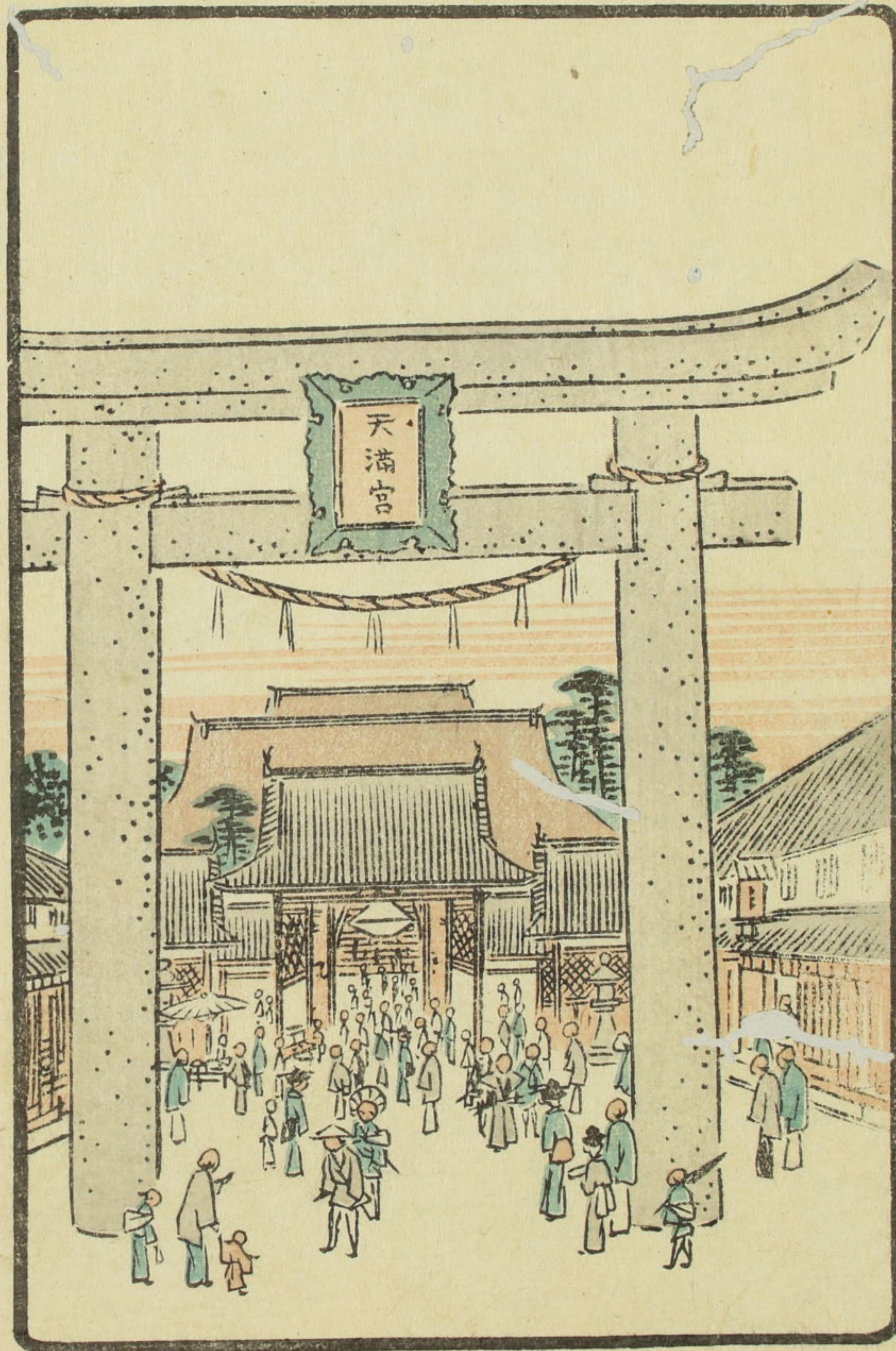
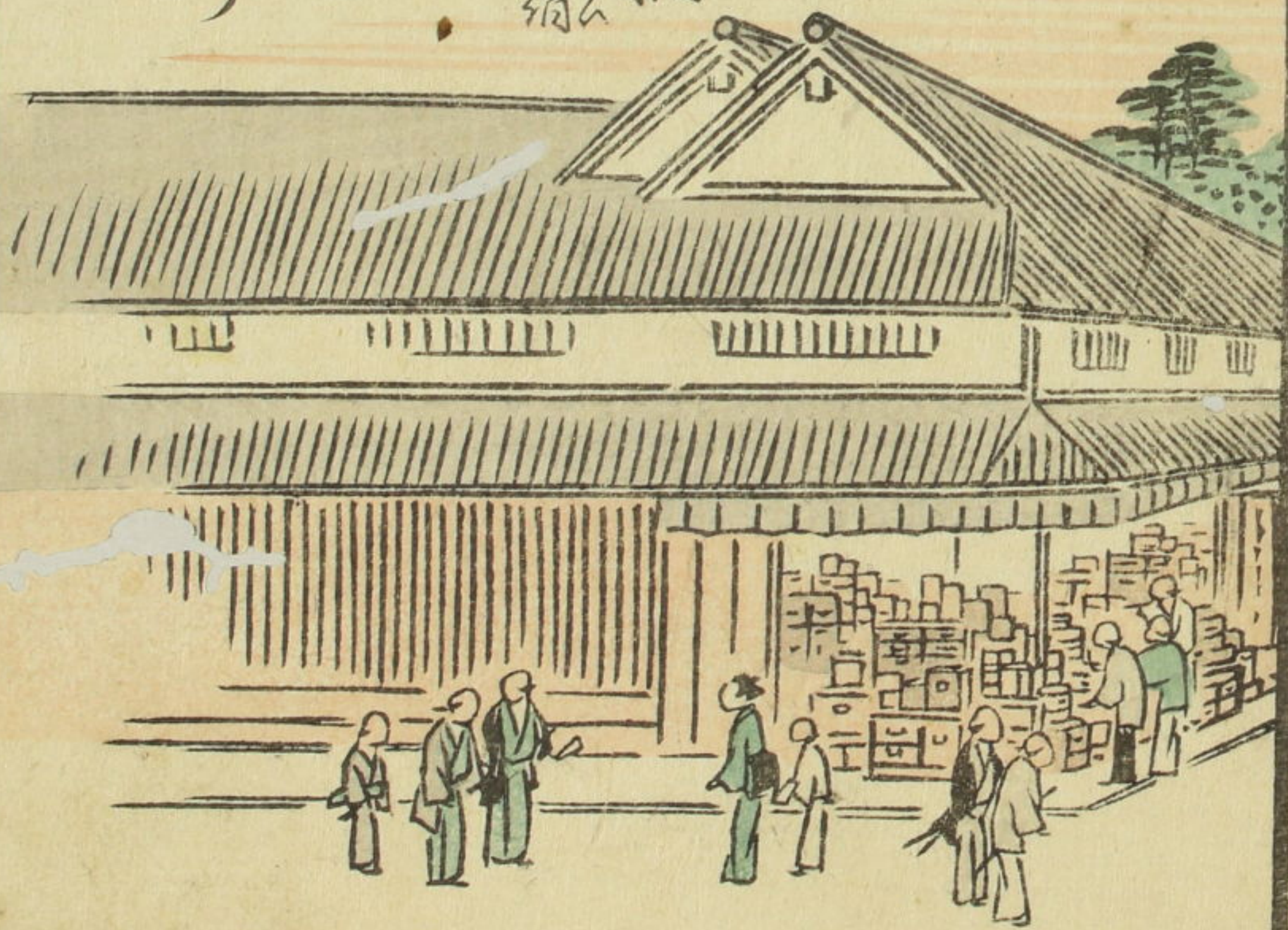
天神橋通りより二丁東の條正面より。此地と天満と号ひ

事。天満大自在天神鎮座。とて故なり。所系本社中央より

大自在天神相殿の東より。手力雄命。法性坊尊。意西より。猿田彦

天満天神

菅神の聖廟多分中別て當社の
 他は起て冥殿ありたるふより遠近の
 貴賤常々詣りて向断り社頭の繁
 栄浪花第一とて正月の初天神とて
 群衆や就中正月の初天神とて
 諸人往來の道に満ち錐と立れ
 寸地も実と初天神とて



初天神

大神。蛭兒尊。其。余。境。内。小。末。社。多。一。畧。之。地。化。之。往。昔。
比。西。小。續。之。松。原。有。り。人。皇。六。十。二。代。村。上。天。皇。天。曆。年。間。
神。託。小。や。か。せ。勅。額。の。つ。く。建。年。給。所。の。り。と。故。小。天。神。の。
松。原。或。ハ。天。神。の。森。る。と。古。書。小。見。て。り。る。程。小。靈。驗。の。り。
る。ま。だ。四。時。は。諸。人。同。断。る。遠。近。より。雜。集。へ。バ。社。内。ハ。昔。の。
或。ハ。軍。書。講。釈。の。小。屋。地。上。より。致。下。降。品。玉。輕。業。の。藝。時。の。
唱。哥。の。讀。賣。其。余。菓子。類。手。遊。具。の。出。店。る。と。地。せ。と。ま。で。
烈。々。朝。暮。の。繁。昌。つ。と。方。は。門。希。ハ。貨。賣。家。煮。賣。店。鮓。屋。饅。

頭。木。草。賣。珍。器。奇。物。の。高。家。軒。と。る。と。と。數。販。と。て。饒。り。と。る。ハ。
皆。菅。神。の。余。光。と。つ。づ。し。例。祭。六。月。廿。五。日。ハ。鉾。流。の。神。交。
と。早。し。て。神。輿。戎。島。の。行。宮。小。渡。御。あり。其。壯。觀。の。美。景。る。
事。ハ。世。に。普。く。見。所。と。る。所。や。と。浪。花。第。一。の。賑。ひ。る。り。

菅。原。山。天。滿。寺。天神の社地のゆまあり天満赤土所といふ境内。小。天。滿。宮。と。
鎮。祭。に。相。傳。ふ。菅。神。影。向。の。時。と。あ。る。此。小。社。を。は。し。り。
といふ。神。像。長。七。寸。と。り。殊。勝。と。り。

惠。美。須。社。寺町の西寺所常の西儀小あり所。祭。蛭。子。尊。左。少。彦。名。

堀川

堀川條の旧戎の社より凡
 二丁余とて堀川より程一丁の
 辺に草芥とて多く積りて
 山の如くなる故に俗に山と
 号せし是昔此地より
 是より東へ淀川とて
 新小井鑿りてせられしより
 大河の清水通下其流
 密く掘りて橋の本と極
 つれ且通航のする
 此は花の頃より遠くの



老若の集り人
 墨客お群て幽雅と
 賞け

實其始と知る

のの其所より
 此と知るは
 景地とあり



令右太玉命三座あり

女夫池旧址女夫池の旧址一説一説此地此地始始池ありて朝来池朝来池

と称稱うう後世後世其側其側又又一の池一の池と掘掘て双双と成成し

より土人土人女夫池女夫池と言言ふふとせりとせりとてとて攝陽群談攝陽群談異

然然るに近来堀川條近来堀川條と新鑿新鑿ありあり淀川淀川は流流と通通

むむふふより女夫池町女夫池町は橋橋と架架して女夫橋女夫橋といひ池池の

埋埋むむ平比平比とありありおふ能勢能勢侯侯の邸邸と建建られ門門

内の傍傍ふ妙見尊妙見尊と勸請勸請あり是是は攝別野間村妙見

山の本尊山の本尊同躰同躰の靈像靈像ふふとせとせば靈驗靈驗とて新新るるが
貴賤貴賤常に詣詣して同割同割と別別るる午の日午の日の御縁御縁日也
とて系譜系譜影影

木村堤木村堤源八源八の渡場渡場よりお地お地の淀川淀川と下の西岸西岸やと堀川堀川の

通通むむ流水流水の樋口樋口より足足よりと下の川川居居る橋橋の並樹並樹と

よりて弥生弥生の花盛花盛る老若老若とて遊遊樂樂とて歌歌と傾傾け破破子子と

同同と奇奇よみ詩詩と作り今様今様と諷諷ひひ最最みとて殊殊更更は堤堤

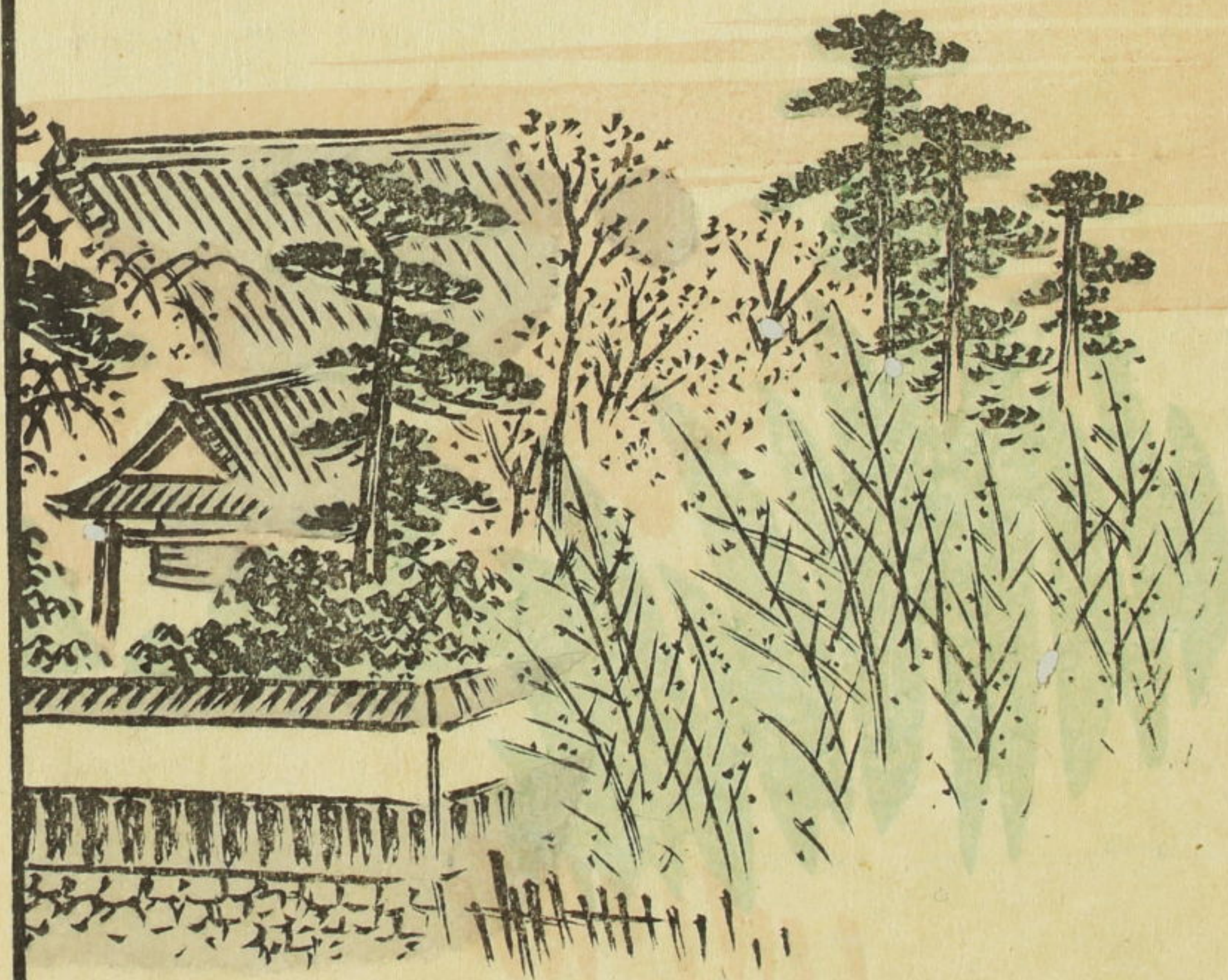
を橋を橋の宮宮對對したる東東の岸岸も爛熳爛熳とる花花の景色景色淀川淀川は

在満寺

天満十目道の
少あり南長柄と

当寺の林鐘の

長川侯より奇附や
原の唐土の番あり
大平十年二月 云云

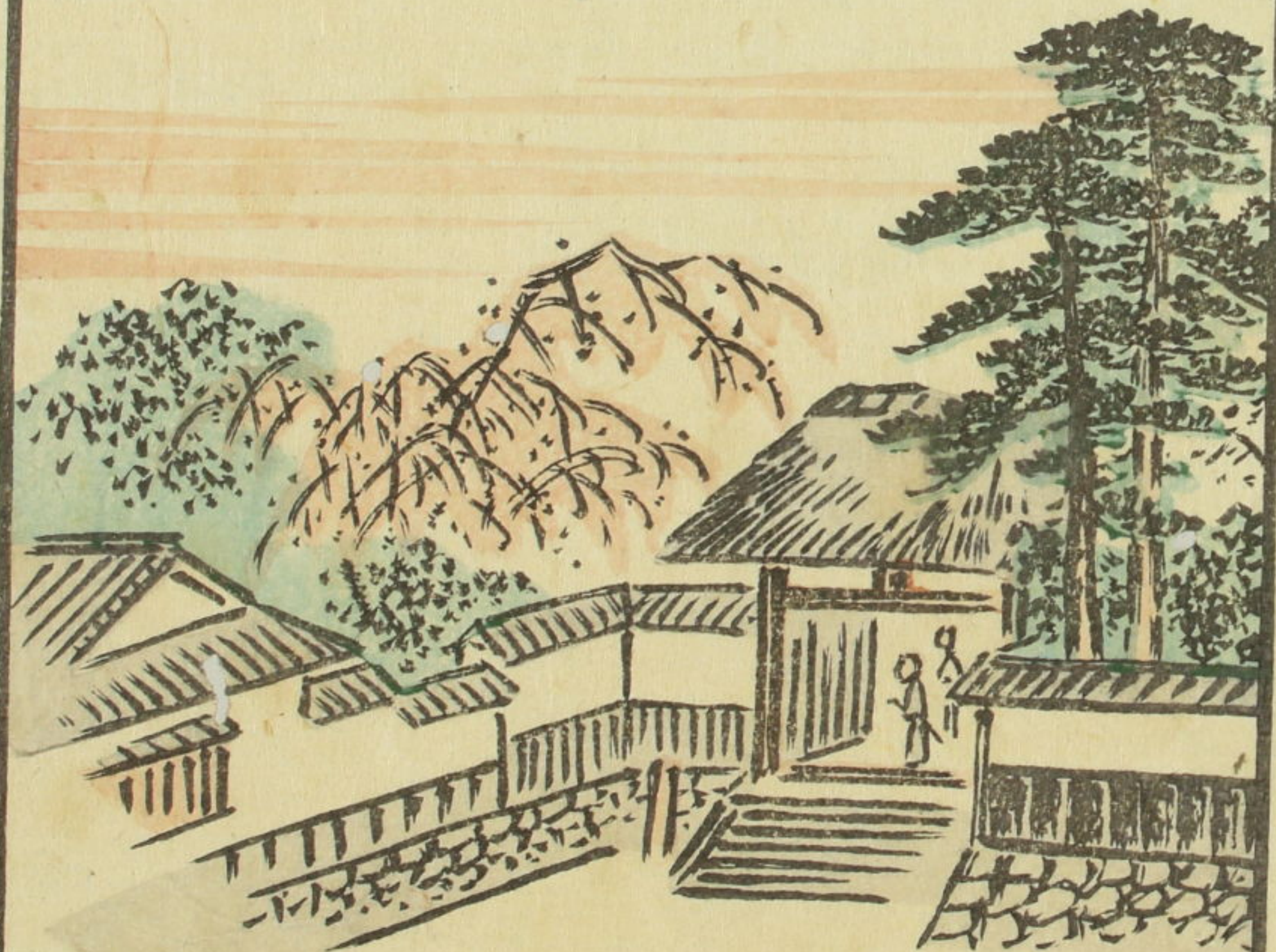


又境内の杉の大樹
巧て花の盛なり
幽篁やて移人夢
おむれて風流をさぐ

中々小島

アノ多福

柳亭
翠鶯



流るに映り古野嵐も余所るべし

川寄御宮 天満川寄あり 國花集云元和年中松平下登等

匡清彦創建し三和尚寺勢一建國寺と号に禪

宗洛陽建仁寺に属す云御例系四月十七日此日難人の

系諸と許し御本殿の莊嚴結構を申も忍むなり

御境内小觀音堂藥師堂能舞臺あり社頭より榎樹数株

あり花の頃殊更ふ美觀なり

天満橋 御宮の西の傍に南あり 淀の大川筋又懸川古久和川平野

川橋間川合流して井小庵合ふ橋長さ百十五間五尺と云

往古城南の岸の傍と大和の岸といひ此由橋と天神橋は

間も橋と架して大和の橋といひ或は渡辺の橋とも号に

りつとも其時ハ川幅廣くして貳百六十間余ありとぞ

京橋 天満川に有る橋と云ふ 故大和川橋間

川金流して橋下より大川は入南に金城ありて登城の御橋

あり欄檻葱宝珠の銘ニ云元和九年造立と鐫り此後より

東へ斤原町相生町とて京師往還の街道なり

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

市あり

鯉 鮒 鰻 鱧 鮓 泥鰌

ちよ
鰻をもちも
河湖のあちち

魚を持もちより交易かんぎありさぬ

最

中絶を以て市の

終之為記

遅く来りて市にぞろろ、



あ
ちんま
者と困魚の間もあ
あ
合ぬと

世に
 常言ふ

事こと小こあられて間まふ

合あひふ

言

サ
ト
ソ

金城の春

輝中子魚

八千唐

其山



金城

京橋の南方あり大手御門の西面ありて東堀ありて八思業橋ありて
故に四通と大手とと号しありて東と西と南と北とを京橋といふ

摂陽祥談云金城へ東生郡大坂王造岸あり云金

七寶の初土中お朽び火も焼くも能く周く以て世に

金城と祝し奉る云城郭の結構守護の厳重に申す

恐き多し城外の風景ありて更なる美観あり二月初午の日ハ

貴族老若群集し遊宴に尚室ありてふ雲雀さへ鳴く

頃ハ此小春の歡樂ありて日くやと賑はる事いふ不

太平の御恩澤仰ぐべし尊ぶべし

網島

糸島の北端ありて地は淀川の堤ありて漁家烈に當りて

新堀小網とて于中船がけありて前より淀川の流る

潔く難波津の通船釣船網舟遊具の屋形船など往来す

眺め東より生駒掠る嶺志貴葛城二上嶽も見へりて

四時より絶景あり故に富家の別宅雅人の閑居風流の

貨食家ありて頗る遊樂の雅地といふべし

大長寺

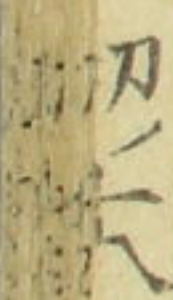
同前ありて境内小鯉塚ありて付物小鯉の奇鱗

あり是より北へ堤づいていりて極宮ありて凡そ所許あり

桜の宮の河川の東の
 岸小あつて社頭のみも
 さうさう水辺より馬場
 の堤よりるまで一園の
 桜として緑生の盤より
 雲と見雪と解ふ
 光景西の岸の川岸
 堤よりゆゑつゞき
 堀川の樋の口まへ
 竹も桜のふみふみ



川とてさきそてお岩の花
 猶緩うて水小映り川風
 花香を送りて四方小馥郁
 程は都下の半銭
 老蒼陸とて舟まで通ひ
 て観るなり并ふありて後日
 遊宴を宴は浪花は終て
 先見の勝地とてぞ



櫻宮（神宮）の訓系天照皇太神より例系九月廿一日より
 當は白野田の小橋故大和川の堤字と櫻野といふ所は
 後世に於ては又旧地の名を以て櫻野宮と号せしむる
 しが社頭の傍に數百株櫻を植しより今の櫻の宮と稱す
 花より号けし如くするも訓謂名詮自性なるべし又是
 より十丁ばかり川上小母恩寺といふ女僧寺より尼僧常は
 綿帽子を製し頗る光美と名物之當寺の北東より田圃は
 中は鵜境といふより頼政の射場と化ると理む所と云

鴨野辨天祠（鴨野の金持の長子あり）京橋の南筋鐵御門と東へ
 ぬけ鴨野橋を渡りて系路の靈驗ありて諸願成
 就する人常に問新あり別て月毎の己日と云々
 群衆して初念と號しこれと信ふ已掃落といふ其縁より
 おのゝ異うて忠あり孝あり又病苦の平金と稱するあり
 或は利欲色欲ありて得る物もまた利慾小神も困らせり
 るるべし又世訓より東の方に左専道の不動といふ後藤
 山友三寺と号し本尊不動明王の御利益掲焉とて日毎

系諸絶び殊更正月廿八日ハ初不動とて群集セリ

猫間川 金峯の東より平野川と後世此川條うづのれ通船自

由うづりしが去天保八九の年間 御仁惠ふつ川幅を

度々底深く溝へめあふり船の往返ふのすやすして

便宜あると甚しう程は此流小橋を架し居る新小家

作し或ハ花紅葉の樹榊棠芳直の類を植て春秋め美

観とて又此傍小朝日菴といふありて清正公と後ふに

御利生新とありとて系諸多し

森宮 猫間川の傍あり 新系用明天皇 人皇 かくて聖徳太子の

御父帝より日本紀は推古天皇六年夏四月鵲二喉と難

波の杜ふ養ひむとて其則世越るといふ攝社末社境内ふ

多し亀井水田趾蓮如上人祈松といふ大樹あり

杉山 あまの宮の 此地ハ金城の驛の方ありて松の大樹繁りしとあり

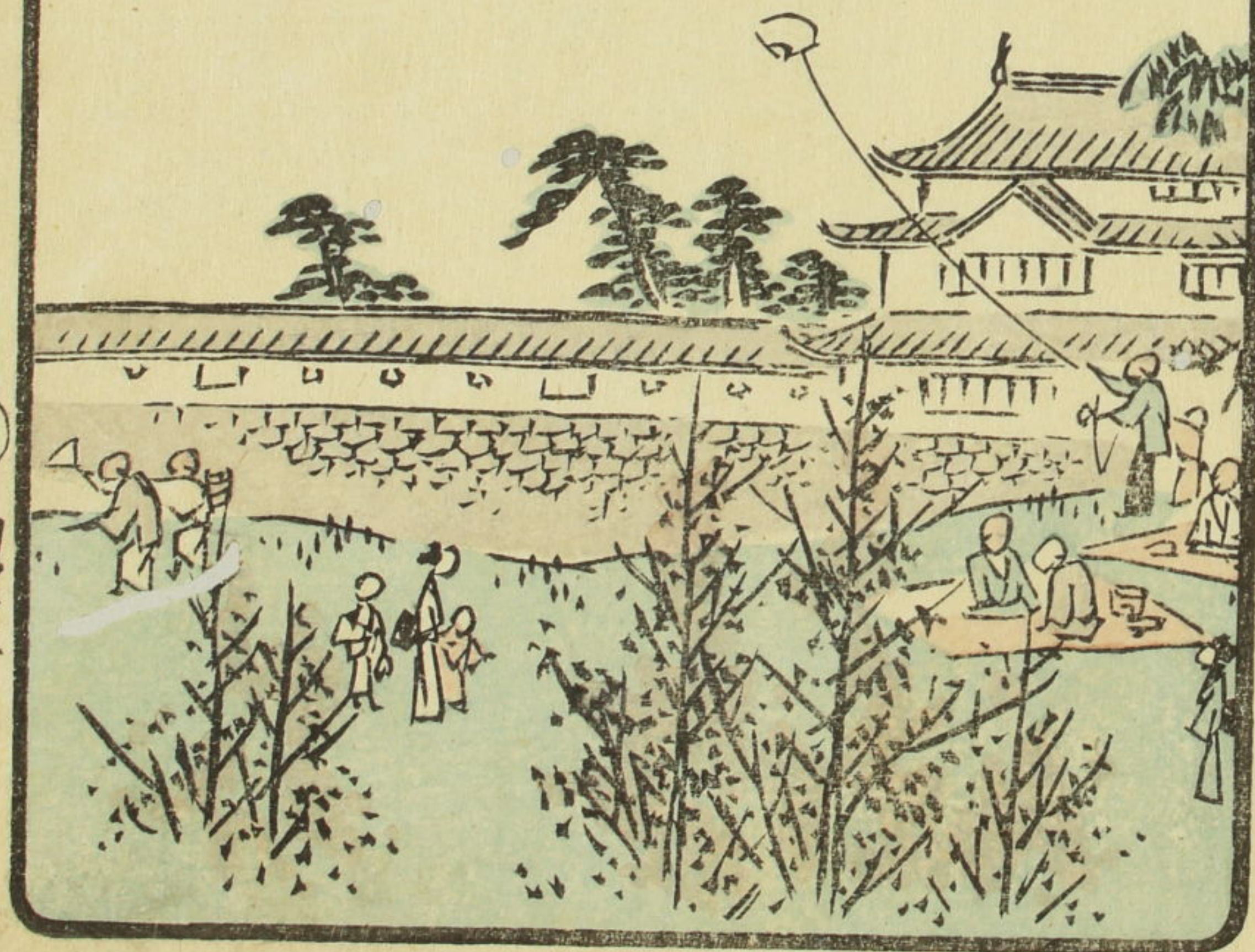
四箇の眺望殊更は風景よき故春暖の頃ハ浪華社貴殿

あに来つて遊宴に別て衣更着和年の日ハ老若群

集ひて最ふとあり

秋山

梅白い桃うあう都下の
 老若あんなまうと辨あといえ
 竹筒をかきけ風あう踊るう
 茶やたのむ老人風のかき小児
 春草をつむ婦あうどあひか
 けあうと紅日西あうと
 とあう



梅の薬師 梅山の 本尊石薬師境内小紅梅の大樹多し二月花の

盛る風流士あはれまつ風流と賞は

豊津稻荷社 梅の寺なり 糸神倉稻魂命やて人王十一代垂仁

天皇十八年の勅請より稲ふ玉造の稲を号は本社の後より

舞臺ありて翌朝より車の山く眼前に連うて風景斜る

凡て世辺と玉造と号する事ハ神代のみ玉屋命也

地は終る始め玉と作らるる所ありと玉造殿 太子

玉造川玉造の末古き小源なり

宰相稻荷祠 豊津の寺なり 信は直田ふと元和の頃より田代

装ふに育とぞ社説る宰相ふと京極宰相侯の陣営

世辺ふ育より期号くるなる屋本殿ハ仁徳天皇と

あり稲荷神ハ本社の後小紅梅其餘末社件多あり畧之

就中三光宮とつハ奥別青麻ハ在サる社の遥拝所なり

此の祈誓とからる者ハ中風の病弱と除せるふと福を原

より病ざるも其願と腹もん事と解ひるふと運ぶ後ら

多しん此地ハ一准の丘ありて東の方と見るとせば比叡

三軒茶屋

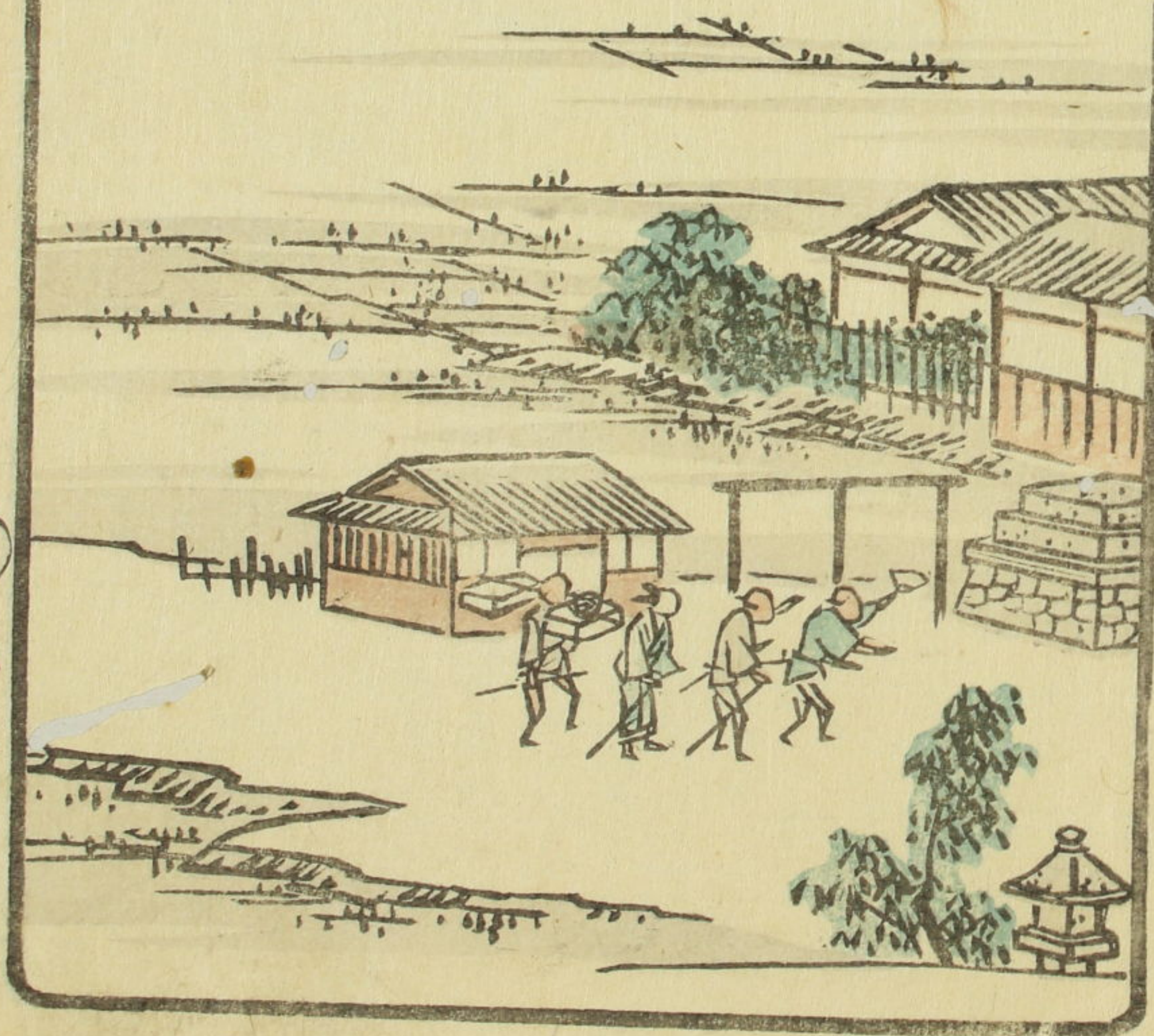
此地ハ玉造の街端にて
伊勢系宮大和巡り大峯
諸木の送別の場所なり
尤衣小酒肴をひき
桑店ありぬる新ハ号け
しるる程小弥生の初旬
より難波菅笠一掃ふる
連る伊勢へん頭あり



初九二

別々の酒豪不群なり
りり這入あり或ハ新瑞子
休むもあつて賑うきて
言ふりりる

其上平日よりどもある
街道の往還する人
の通り絶る間あり
信美山の毘沙門生駒の聖天
ホハ月参の信者ありて皆
る桑店と休足所と定む



初九二

山の高根不續きて漸々小南に連り生駒掠々願信貴の山二上
嶽金剛山より葛城の山へまで一眼小見へるや此の
るれ光景なり

圓珠菴 東三津岬 此地ハ契沖阿闍梨の遺蹟なりて庭中小墓
碑より碑文ハ五井蘭列の撰なり 其文師ハ國學と博シ和書
数篇と著けり世に著し知る所なり元禄十四年正月廿五日此の
於て寂に年六十二ある戌年百五十年の忌より當れより風流の
好士追悼の和歌と遠近より勅進して是所より向られぬ

味原池

小倉村の一名比賣古曾神の御影池

西より一名比賣古曾神の御影池

池味原の堤より味原御牧 延喜式

産湯清水

味原池の水より名泉なりて清徹

外小湯と四時より酒より味原珠は甘味なり丘の上より

稲荷社あり此丘と法藏山といふは地ハ細めは賣古曾社の旧地

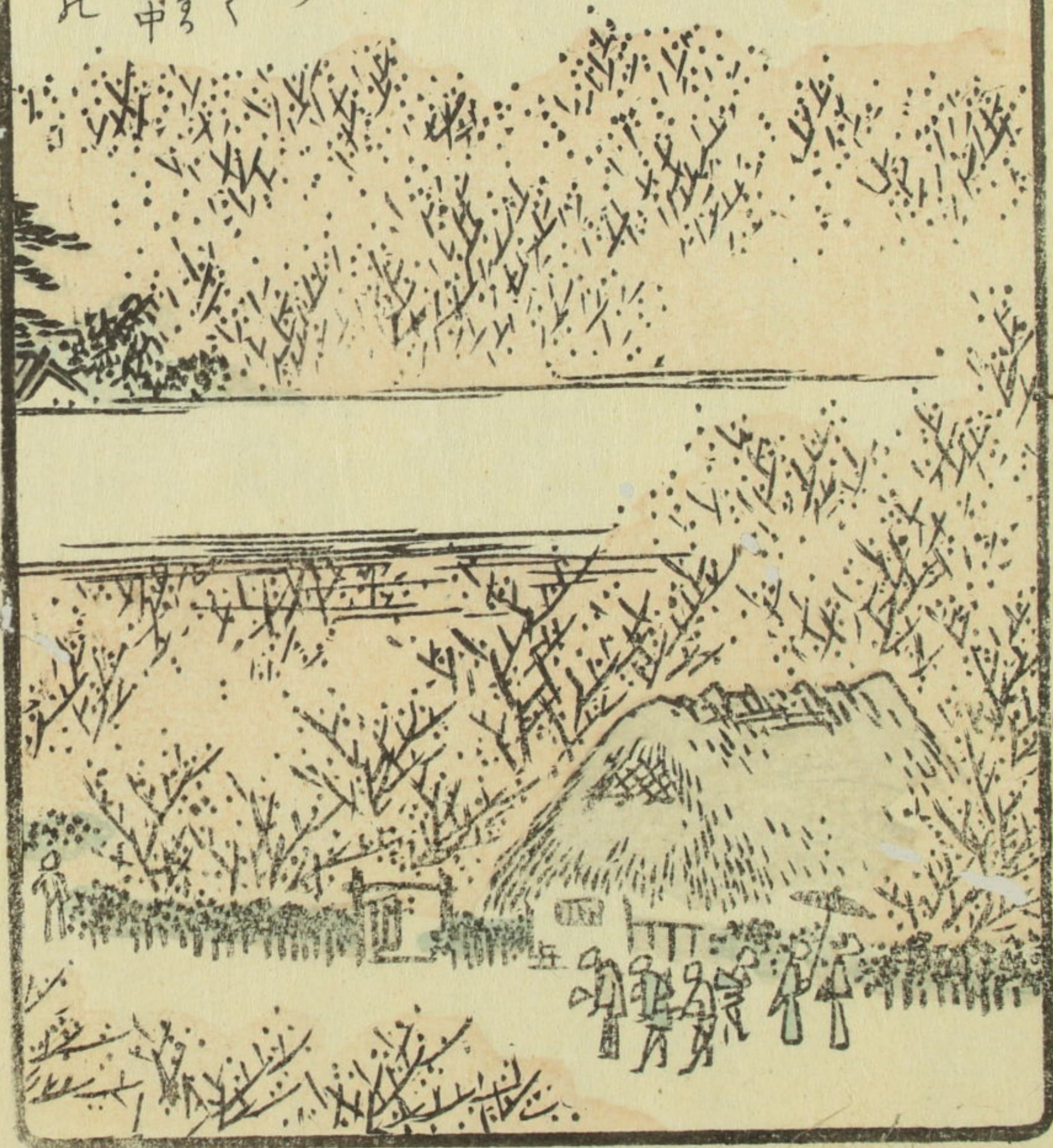
なりとて今尚神主の宅ハ此あり比賣古曾社は是より東の

方小あり跡にて辺ハ一園ハ桃畑なりて弥生の初旬花の頃より

老翁男女より群り野徑より元湯に

野中観音

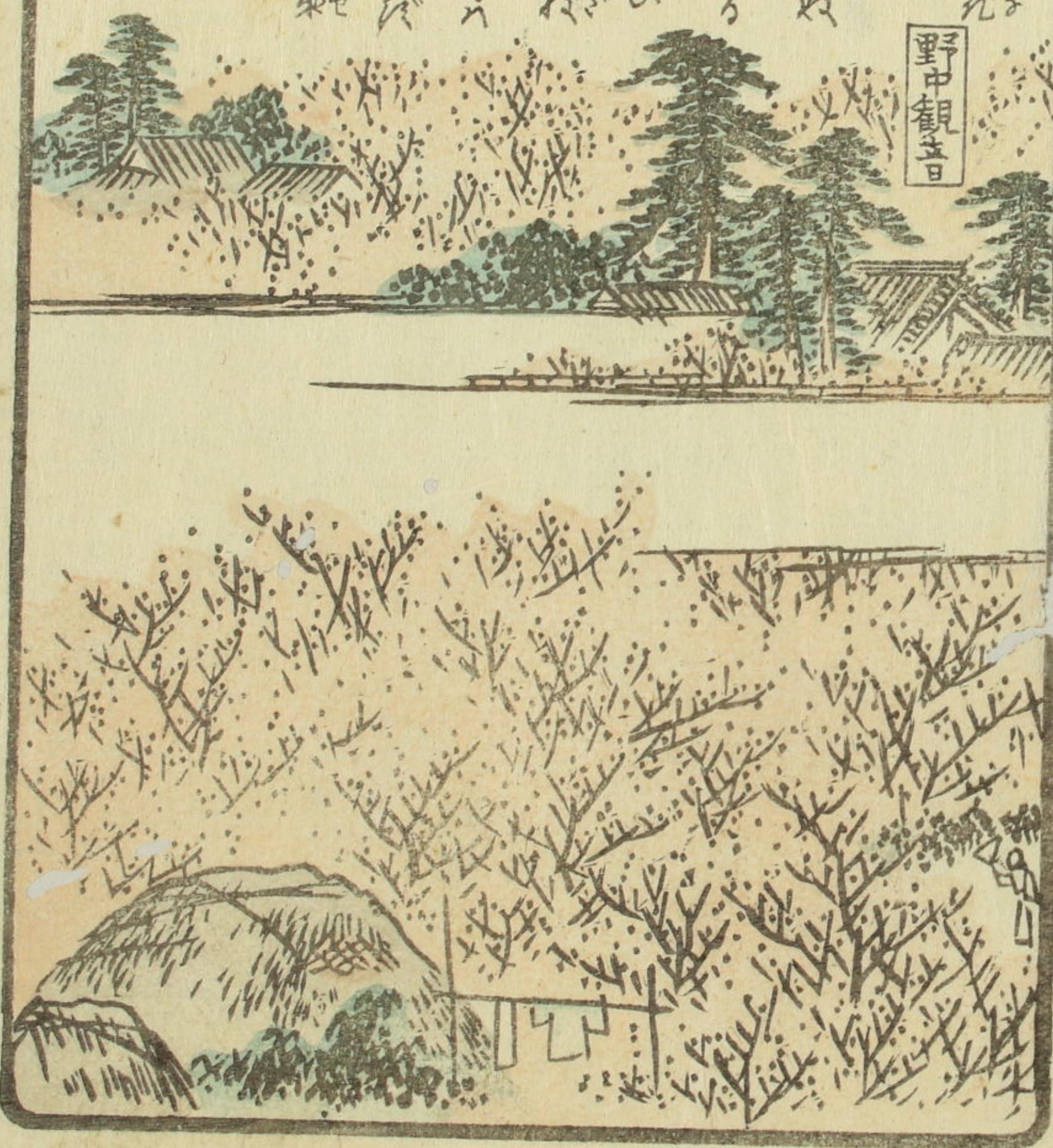
玉造小橋の辺より
天王寺までの間凡そ
一畝の桃畑をれば野中
と云ふ地あり桃は



永六郎

最中よりわい白ふ花
の盛なりん天も輝く
光景なりれば物のね
花の下と人へは休む
るなりぬのくお現ひ
つらつと桜や新芽の枝
うらうとけける常より
彼松原の仙境なりと云ふ
其一時の業花とて
と延る花なりと云ふ

野中観音



永六郎

寶樹寺



初九

當寺ハ梅ヶ谷の山

して東高津あり

本堂の後方僧坊の

庭前ニ楓の大樹数株

あり紅葉の頃ハ詩哥の

雅客競ひ来つゝ

遊樂ハ尚林泉の

風景より一ハめ

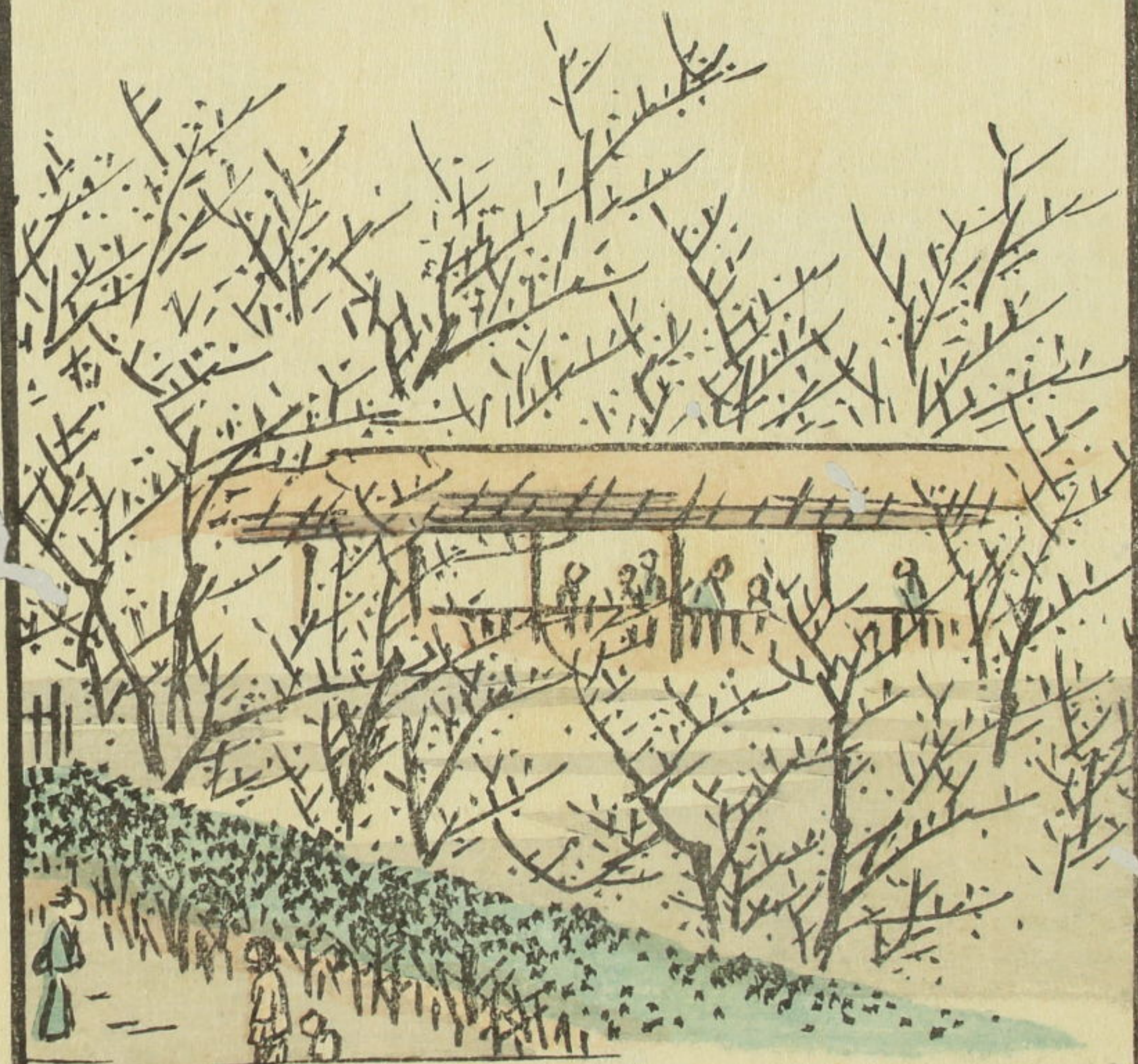
眺望あり



初九

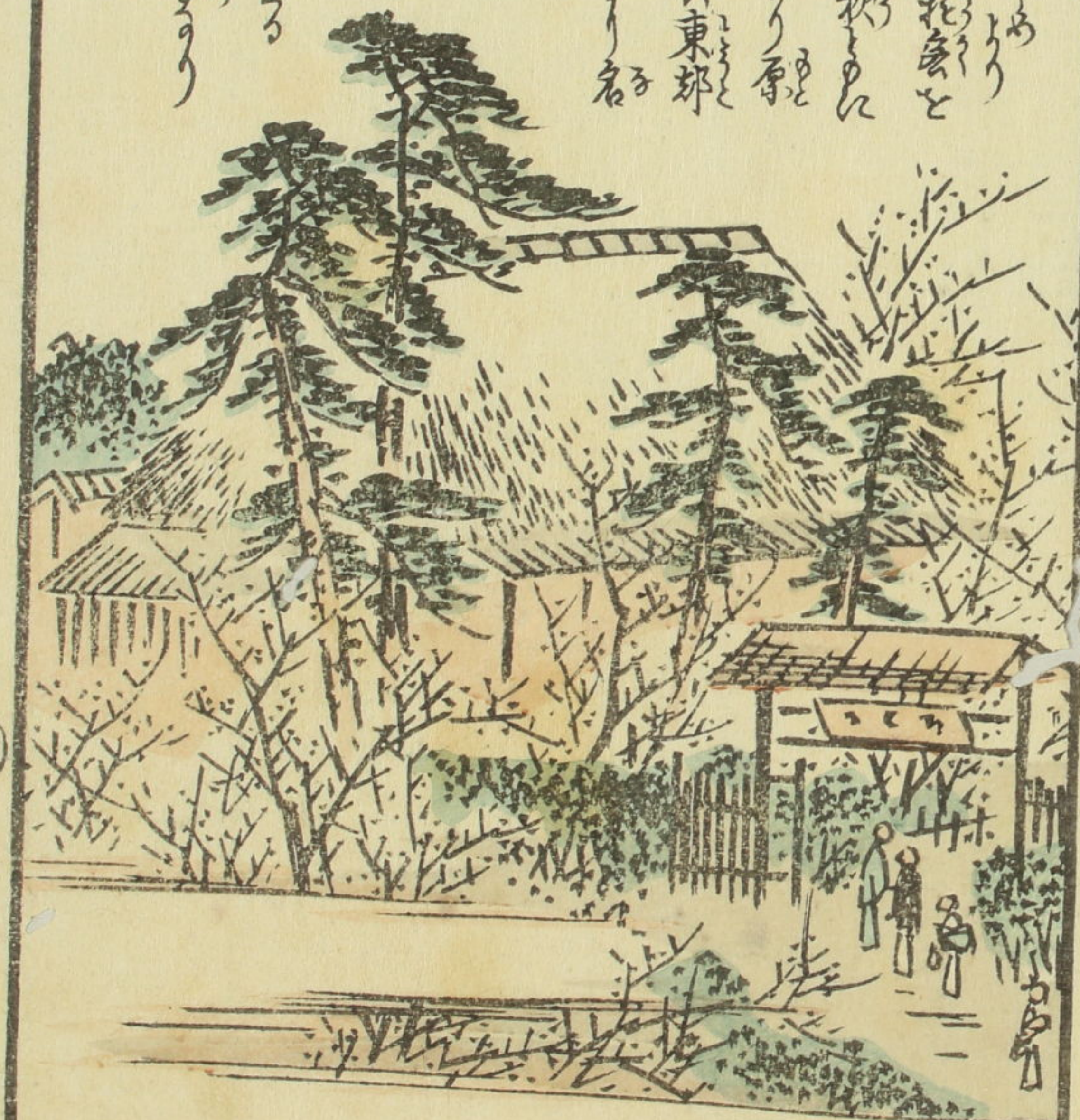
梅屋敷

此地の上の宮より乾の方へ
して生玉馬場前の東へ
あり園中小数株の梅と
植つて縁樹下ふ席と設く
る如月の花は頃
清香や方ふ葉は
ゆ人も唯こ過る
得ばゆめより
好士もひき集む
遊観は又縁て



初六

遠くは長月の
花壇よりそ
るるいふ
美景なる
此梅や
竜子ありて
文化初年の頃
これと
換へて期はるる



初六

野中觀音のらふくあん産ぬの渡のの寺と遍明院といふ本尊十一面觀世音を

和列長谷寺の吳像と同本うて悪七名湯景清の守り本尊

るより信ふ當寺と難波寺といふ説詳あり

上之宮うのみや野中の所系欽明天皇といふ社頭は橘芳萱ホ数株あり

て春秋美景あれば衆人群集しと賑し

北向八幡宮きうひつぱんぐう生玉の門前の有天正慶長の年間城中の諸士此地に於て

射游の藝古とるはより子矢作と初清ととぞ今も五月五日に

流鏑馬の儀式行はるは昔の遺風ありて地名も今に傳ふ

といふ北向の御城守護の謂なりと聞ゆ

金毘羅祠こんぴらで八幡の前より傍との角當寺の鎮守ふとて靈驗なりと

かりとて老若あそとをび別して毎月十日うの遠近より諸

人群とるより本尊の聖觀音より長三尺五寸飛彈内通の

作と安置はといふ

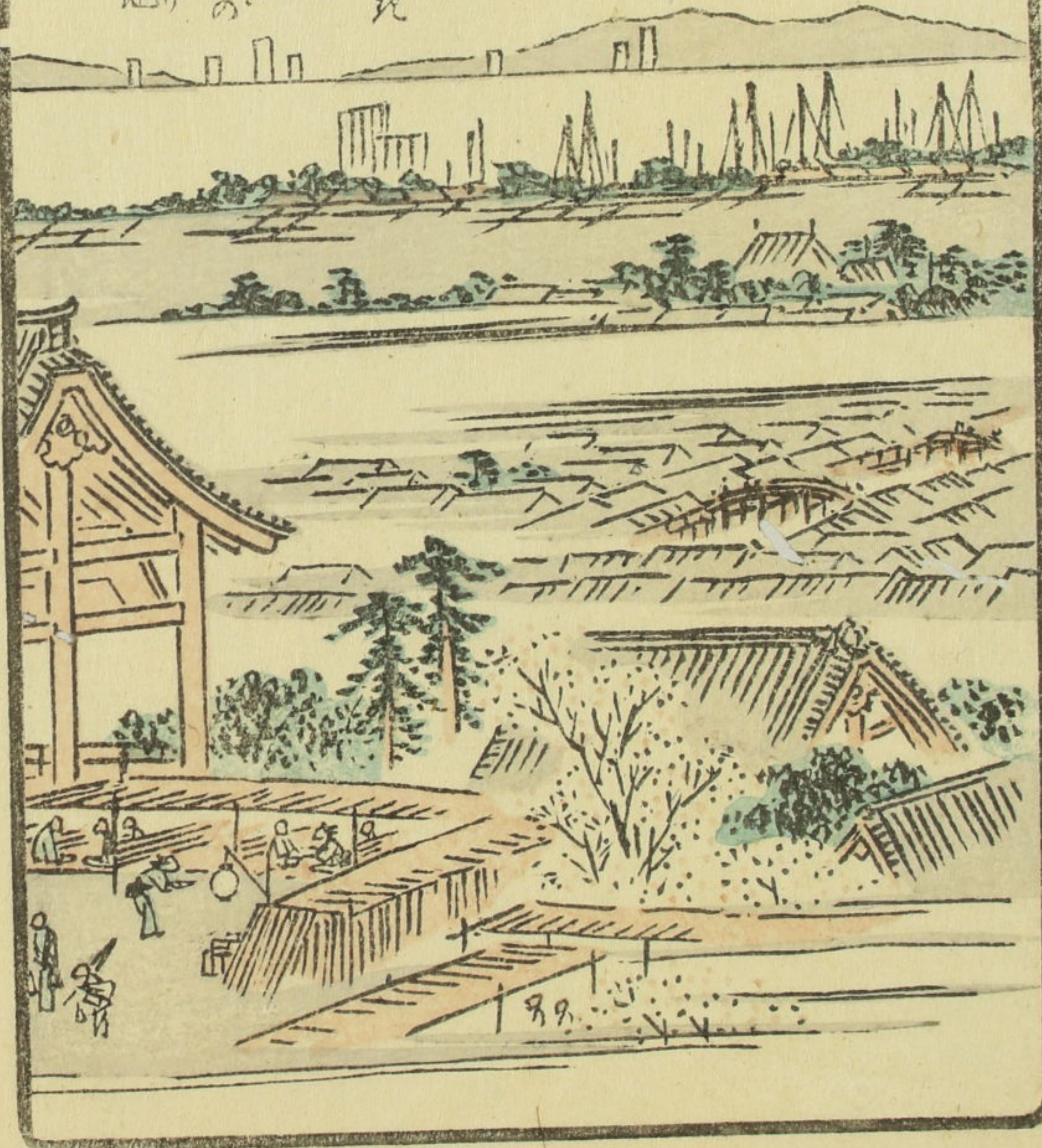
辨財天祠べんざいてん生玉の前の傳云ひ海中より出現ありといふ傳ありとぞ

社頭は蓮池ありて夏日より紅白の花咲きれて美觀あり

生龜神社なまがめ馬場市の西面ありてお祭生魂命大國玉命より延喜式

生玉社

本社の後辺の舞臺
西の方と遙く見ると、
市中の方戸の薨の波の
河口の帆柱筆め
繁るに似たる洋々しく
滄海と千般百船の出入
白帆の光景けふ類ひな
眺望といふべし
又社頭小橋本多の弥生の
幽艶斜るに門前の池
ふ夏日蓮の花紅白と



初

まへて咲か

荷葉の白

はる

さ



月

眞言坂

生玉の社僧ハ貫首南坊を
 ちめ余九院あり故ふ
 是と十坊といふ
 此坂と上ればた右
 おく寺院あり
 悉く眞言宗
 るるんや
 物へきけ
 そあゝるたぜ
 びづも大師の
 却影堂はうゝ浪花



大師めづりのれり
 るる 就中坂とよる
 尤の第一と橋本坊と
 いふ此寺内ハ秋葉権現
 の祠観音堂あり
 諸人殊か多し



曰生國魂二座ト云社頭ふ末社許まあり本地堂の本尊を
薬師如来より聖徳太子の御作と聞ゆ大師堂の本坊
堂の左ふ並ふ歡喜天の宮北の方にあり迎世本社の後
辺ふ森臺と建宮ありて瞻望一しぬあり

高津社西ふ津所系仁徳天皇より往古高臺の皇居の余
風と摸せりありて大宮所の舊地の今の御城の辺なりしが
天正年間豊公其地より府城と築るよりより神社とせふ
遷しよりと境内に摂社末社より高臺の頌碑と

本社あやの西傍より平安の茶煥彦章甫の撰る所なりは社
頭へ道頓堀の東にありて一准の丘よりと遷し眺め浪花
の市街とありめ川にの出船入舟一瞬の中ふありて風系茅
一の勝地なり鳥居傍より常に遠眼鏡と置て諸人と悦む
しむ茶店の湯豆腐の世に名をとり石陽下の植木屋より
四つとも花絶び殊に牡丹の花檀の比類する美観あり
宮前の石橋と梅の橋より流きと坂川など号するハ浪花
津の梅よりものなるべし此橋の下小瑜伽社あり寺と自性院

高津

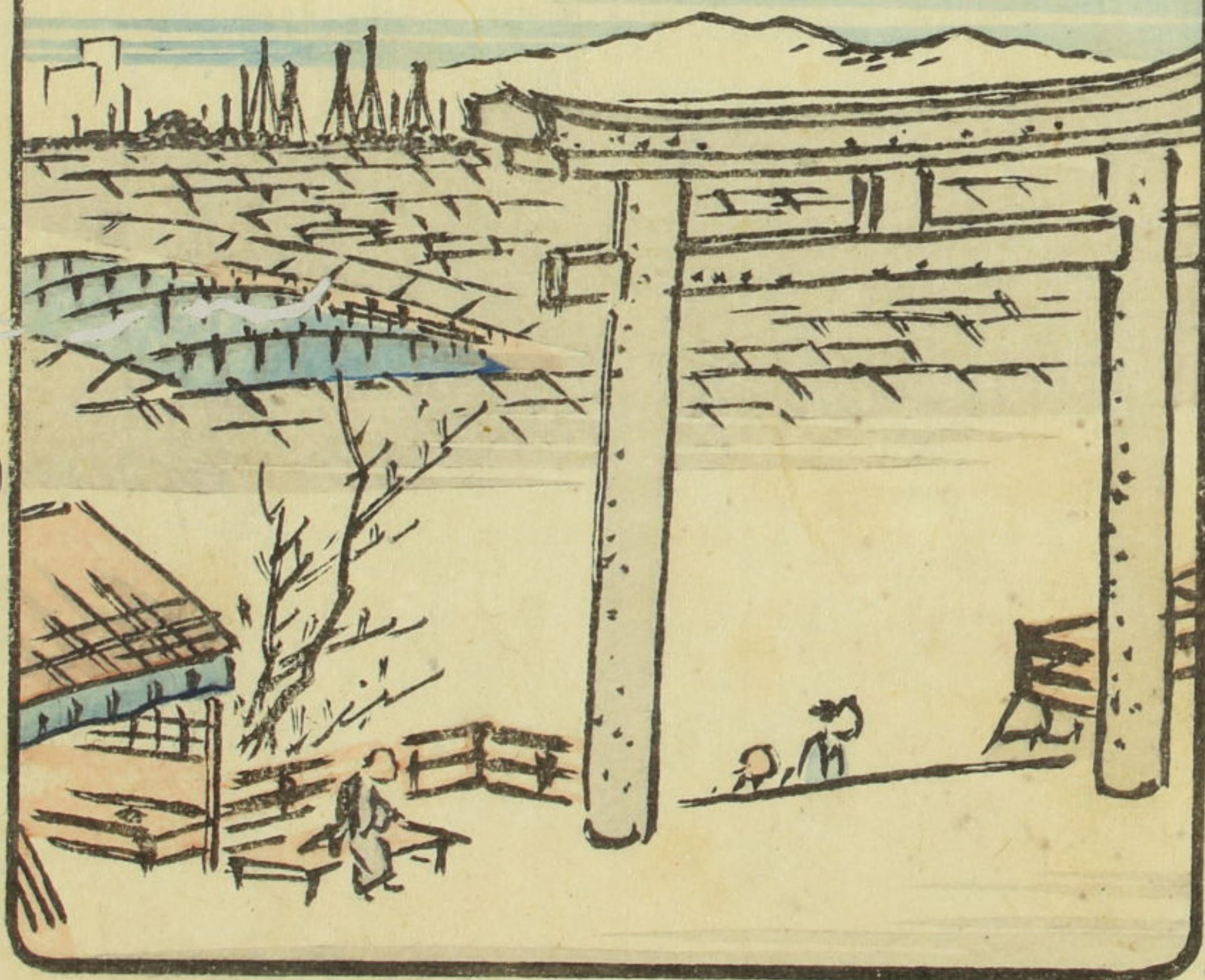
遠眼鏡屋の云
 夫最初番ふとくすうん
 なるがりの傍よりうき
 空のひらき織りいへる川
 天保山入るのけり
 衣の摩耶山武庫山甲山
 あり町く東西の御堂九い
 るんば鉄眼今宮のえびと
 木津川白千ねの風景



津路島より傾戸の浦へ
 うる千巻のる声も
 耳へあてられがき
 余りあてられのけり

うきと見えど豆磨の
 あまのいへし風を
 一とて二とてのけり

忍びのふきと見えど
 申すのいへし風を
 一とて二とてのけり



とつみ三所の観音堂金毘羅祠あり

頼焼地藏尊 谷町とどろ地蔵坂の角 常道に慈覚大師の作し

て往昔婦人の命ふかり焼鐵の釜を救せり靈佛より

委くハ縁記に見へり故ふ世は身代頼焼の地藏菩薩と

賞し常に諸人間あり願る灵験ありたりとぞ

又此寺の東に隣りて願生寺といふ浄土宗の寺なり此寺内

大樹の老松あり往古寺院建営の時超譽といふ住僧ちの靈

衰と樹をいへて植る所とて今益々繁茂せり妻ハ新葉岡集に見へり

安政二乙卯年四月書り

京と三條通市書所

吉野屋仁多書

江戸日本橋通武丁目

山城屋佐三書

大坂今富橋筋小太夫書所

河内屋甚多書

書林

以
至
如